



NEWS STREAM

TETSUDO

遠山鐵工所代表社員てつお君の
ニュース番組へようこそ

木下川排水機場

遠山鐵工所の鉄管が使われている、東京の治水事業の最前線



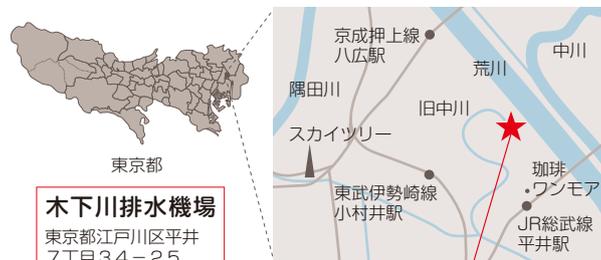
東京都江戸川区にある「木下川排水機場」には、遠山鐵工所の鉄管が使われているよ。そこで今回は、木下川排水機場の周りがどんな場所か見てきたよ。木下川排水機場は、江戸時代から続く東京の治水事業の中で重要な役割を果たしているんだ。荒川と旧中川の間にあり、水門と連携して、潮の干満の影響を遮断して旧中川の水位を調整したり、街の中を流れる旧中川の水質を良くしているよ。「NewsStream vol.1」の裏面では、東京東部低地帯の治水の歴史を少し詳しく紹介するよ。



旧中川から水門の向こうに排水機場を望む



荒川側に設置された水門



木下川排水機場

東京都江戸川区平井
7丁目34-25
(最寄駅: JR平井駅)

遠山で生産されたダクタイル鑄鉄管が使われている(φ1350mm~2500mm)



散歩コースにもなる水辺公園。周辺は下町情緒も漂う住宅街

旧中川水辺公園と荒川



穏やかな旧中川周辺の水辺公園。春は桜の名所にも



川底や魚群が見える透明度。ハゼが釣れる

旧中川は、木下川排水機場で排水の水質を良くしているので、魚がたくさん住んでいてカワセミも見かけられるような綺麗な川なんだよ。地域の人たちの憩いの場になっていて、平井の駅から歩いて排水機場まで川沿いに歩いて行けば、とても気持ちの良い散歩コースになるよ。荒川も川辺は運動公園になっていて広々として気持ちが良いよ。



荒川放水路。河川敷は運動公園に



周辺は寺社も多い。煎餅屋さんや駄菓子屋さんも住宅地の中にある



東京スカイツリーも近い

平井さんほ

珈琲ワンモア

昭和レトロ&苦旨コーヒー



「誰でも好きになるコーヒーじゃダメ」と話すマスターは笑顔。自家焙煎で淹れる拘りのコーヒーにサンドウィッチは、懐かしくてやさしい味。平井駅北口徒歩1分の喫茶店ワンモアは、創業49年(昭和46年創業)になるよ。遠方から観光で来る人も立ち寄る名店で、ホットケーキやフレンチトーストが好まれるけど、本当のおすすめはサンドウィッチとのこと。平井散歩の朝はワンモアの少し苦いコーヒーから始まるんだね。



おすすめハムエッグサンドと珈琲



店名も看板も昔懐かしい下町にぴったり

中川の歴史 東京東部低地帯の治水と木下川排水機場

「木下川排水機場」の役割を調べると、江戸時代から続く東京とその周辺地域の治水事業に行き着きます。東京の周辺地域の地形の歴史を遡ると、①縄文時代に海だった地域が徐々に陸地になり、②農耕地帯として発達するが、その後、③明治時代になって急速に都市化していきました。その中で、河川は、農業用水から工業用水や生活用水に変化していき、洪水や公害を防ぐために大規模な治水事業が必要になりました。ここでは簡単にその歴史を紹介します。

① 縄文時代の海岸

貝塚の分布などを調べると、先史時代の海岸線がわかります。現在の葛飾区や江戸川区、墨田区は海でした。右図aのような海岸線であったと推測されます。やがて、土砂が海に堆積していき、陸地が広がっていきます。

「関東ローム」という言葉がありますが、この場合の「ローム」とは火山噴出物が風化してできた赤褐色の土のことで、関東地方の土壌は浅間山や富士山などの噴火による火山灰由来の細かい泥状の土がメインです。それが何世代にも渡って積み重なって肥沃な農耕地へと発展していきます。

埼玉県の大宮の辺りは台地で、その東北側から東京都の東部地域にかけては中川低地帯と呼ばれています。墨田区、江戸川区辺りの海岸地域には、荒川、中川、江戸川の3本の河川が集中的に流れ込んでいくことになり、後の時代に大々的な治水事業が必要となります。

図a 関東の貝塚分布と先史時代の海域



② 江戸時代、農耕地帯として発達

徳川幕府が江戸に開かれると、農耕地の拡大、運河の整備などが行われることになりました。全体を、江戸時代に始まり明治時代にまでまたがる「利根川東遷事業」と考えることもできます。江戸時代の始めには、隅田川、中川、江戸川は、今とは全く違う形で流れていましたが、人工的に川の流れを変え続けて、現在の流れになっていきました。治水事業の大きな目的は、埼玉県から東京東部にかけての農地用水の確保でした。また、人が多く住む江戸を洪水から守るために堤防や堰を作りました。現在の利根川をメインに、河川を整理していった時代と言えます。

木下川排水機場が設置されている旧中川(中川)は、農業用水確保のために江戸時代初期に作られた亀有溜井で堰き止められていました。その後、1729年、徳川吉宗の時代に小合溜井(現在の水元公園の辺り)が作られて今の川の流れに戻されました。図bは、江戸時代の中川を中心とした河川の変遷を簡単に示したものです。



図b 江戸時代の中川周辺の変遷簡略図(主な川のみ表示)



江戸時代は農業用水路を引くために水を溜めておく場所が必要になるので、溜井という場所がありました。b-1では中川の流れを「亀有溜井」で溜めて使っていました。洪水の影響でこの溜井が使えなくなり、b-2では現在の水元公園の位置に「小合溜井」を作り、中川は昔のように流れました。明治以降、洪水を防ぐために放水路が作られていき、その結果、中川は分断され木下川排水機場が作られるようになりました。

③ 明治時代になって急速に都市化

明治時代になると、近代化・都市化が急速に進みます。鉄道が登場し運河が必要なくなり、農業用水よりも生活排水の処理や洪水を防ぐことが大切になっていきます。また、農業地だったところに工場が立ち並んでいくこととなります。工業用水を地下水に求めたりもしたので地盤沈下が起こります。農業用水として必要とされていた大量の水も使われる事がなくなり溢れてくることとなります。洪水の危険性が高まり、治水事業の目的が変わることになります。特に明治43年の大洪水は甚大な被害をもたらし、根本的な改革が必要になります。その結果、昭和5年(1930)に完成する「荒川放水路」が開削されました。図cは放水路の地図です。

荒川放水路が作られたことにより、中川は分断され下流域は「旧中川」とされ、荒川放水路との間には水門が設立されました。その後、現在の木下川排水機場は昭和52年度に完成しました。隅田川と荒川放水路に挟まれた墨田区と一部の江戸川区は、川の水位よりも低い土地=低地帯で、その低地帯の排水の管理を木下川排水場も担っています。東京東部低地帯は、今では洪水の危険性は低くなり、住みやすい下町の風景が広がる豊かな街になっています。

図c 荒川、新中川、江戸川の放水路簡略図(主な川のみ表示)



協力：葛飾区郷土と天文の博物館(学芸員さんに江戸時代からの東京東部低地帯の河川の歴史について教えていただきました。ありがとうございます。)

